

令和5年度地域連携担当教職員等研修会実施報告書

実施期日 令和5年6月28日（水）13:15～16:20

会場 オンラインにて開催

出席者数 出席者数 87名

（小学校31名、中学校10名、義務教育学校3名、県立学校9名、
特別支援学校7名、市町村行政担当者25名）

1 開会（13:15～13:30）

- (1) 開会
- (2) 諸連絡

2 講演（13:30～15:00）

演題：「コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進について」

講師：文部科学省 CSマイスター・ふくしま学校と地域の未来研究所

代表 安齋 宏之 氏

(1) 略歴紹介

- ・小学校教員（昭和60年～令和4年3月末）
平成25年～ 文部科学省 コミュニティ・スクール
推進員（CSマイスター）
- ・平成26年～ 文部科学省 コミュニティ・スクール
推進員等に関する調査協力者会議 委員
- ・令和3年～ 文部科学省 コミュニティ・スクールの
あり方に関する検討会議委員



(2) はじめに

- ・コミュニティ・スクールの導入校が、令和4年度15,221校（42.9%）、福島県では、216校園（27.6%）、全国では今年度5割を超えるのでは。
- ・学校は、新型コロナウイルス対応や新学習指導要領への対応、働き方改革、いじめ不登校児童生徒の割合の増加等。教員は過労死ラインを超える現状。
- ・予測困難な社会の変化の中、未来を担う子どもたちを育てていくのは大人の責任である。学校は、地域・家庭は、教育行政は、どうあるべきか。
- ・コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進・充実を図り、「地域とともにある学校づくり」「学校を核とした地域づくり」の実現を目指す。
- ・コミュニティ・スクールと地域学校協働活動は、それ自体が目的ではなく、あくまでもツールである。

(3) CSを活用した「地域とともにある学校」づくり

① コミュニティ・スクールとは？

- ・イメージとして、地域の人とイベントをやる。〇〇フェスティバル、防災訓練。地域の方が学校を支援する。読み聞かせ、ミシンを使った学習の補助、環境整備等。地域貢献活動を行う。地域清掃活動、〇〇祭りへの児童・生徒への参加。
→このイメージは間違い。
- ・コミュニティ・スクールとは、学校運営協議会を設置した学校のことである。
- ・学校運営協議会とは、法律に基づき教育委員会により任命された委員が、一定の権限を持って、学校の運営とそのために必要な支援について協議する合議制の機関のことである。

- ・委員には、推進員（コーディネーター）を入れることができ、必要に応じて校長はメンバーを推薦できる。学校経営の味方を増やすことができる。
- ・校長や教員は数年で異動してしまうが、地域住民、保護者など変わらぬメンバーが持続可能な教育を進めることができる。
- ・学校運営協議会の主な機能・権限は方針の承認、意見、人事への意見であり、法律で守られているので安定して参画することができる。それだけ重要な機関である。
- ・学校運営協議会を通して、地域力を高めることもできるが、あくまでそれは副産物であり、学校を核とした取組である。
- ・コミュニティ・スクールとは、学校の教育目標達成のために、保護者、地域住民が学校経営に参画し、学校の自主性、自律性を確立し、教育の最適化を図るために協議する仕組み、またはその仕組みが導入された学校である。コミュニティ・スクールは、「地域とともにある学校づくり」を行うためのツールの1つである。

② 「地域とともにある学校」づくりに必要なこと

- ・共有できる価値ある目標の設定

なかなか人が集まらないという課題が聞かれるが、すべての人にとって価値ある目標が設定できていないことが原因の一つである。学校だけでなく、保護者や地域住民と熟議を活用して、子どもたちの未来、地域の未来を描くことができる「価値ある目標」を作ることが大切である。



- ・合意形成による確実な事業遂行

保護者・地域住民とのプロセスを重視した合意形成を図ることで、当事者意識、参画意識が高まり、確実な地域学校協働に繋がる。熟議を繰り返すことで当事者意識が高まる。

- ・学校評価の活用

学校評価を有効に活用する必要があるが、子どもたちの成長の評価であるので、CSの評価は難しい。

(4) CSと地域学校協働活動の一体的促進

- ・地域学校協働活動とは、幅広い地域住民等の参画を得て、地域全体で子どもたちの学びや成長を支えるとともに「学校を核とした地域づくり」を目指して、相互にパートナーとして連携・協働を行う様々な活動である。

① 一体的推進の必要性

- ・CSと地域学校協働活動の両方を核として2つの仕組みを上手に使うことで「社会に開かれた教育課程」の実現や課題解決につながる。
- ・『社会に開かれた教育課程』は社会との連携・協働によって実現を図っていくものである。そのためには、「情報源」「場や機会」「仕組み」が必要であるが、それがCSと地域学校協働活動である。

◇価値ある教育目標の設定・共有

◇学校・地域のリソースを最大限に生かした教育課程の編成（カリキュラム・マネジメント）

→本来学校ではバランスよく育てていくのだが、育てたい資質の明確化と焦点化もありえる。その際、学校・地域のリソースの活用が必要である。

◇学校教育・社会教育の連携（アクティブラーニング）

→「放課後子ども教室」等を授業の補充、進化、発展の場として活用できる。

- ・学校が抱える様々な課題を一気に解決することは困難であるが、CSを使って時間をかけ、少しずつ前進させることが大切である。
- ・五百川小学校の例では、CSで教職員の多忙化解消について取り組む中で、保護者や地域住民が教職員の忙しさをよく理解することにつながった。そのため学校へ協力する意識が

高まったことが大きな成果だった。

② 一体的推進の課題

- ・学校支援を重視するあまり学校が主体であるかようになってしまう。一体的推進の主体が教育委員会であることを再確認する必要がある。
- ・目標の共有が十分でないために協力者が集まらない。長続きしない。
- ・導入時は教育委員会が主体となっていたが、導入後は学校任せになってしまう。

③ 一体的推進の方向性

- ・今後、地域学校協働活動推進員を各校に常駐させ、連携・協働のキーパーソンとして活動していく。
- ・教育委員会が一体的推進の主体となり、他課や関係機関等とも連携を深めていく。
- ・未来及び現在の地域社会の担い手として、高齢者も含めて当事者意識を高めていく。

(5) 本日の参加者への期待

① 教育委員会への期待（伴走支援体制の構築）

- ・残念なことにCSの形骸化が起きつつある。継続的な支援、伴走支援体制の構築を行い各学校のニーズや実態に即したきめ細かな支援を行い、「自主的・自律的な学校経営」ができるようにしてほしい。

② 地域連携担当教職員への期待

- ・「チーム学校」の中に外部の視点を持って活動してほしい。また、校長、教頭、教務等（事務、用務員、支援員）と連携チームを作り、リーダーシップを発揮してほしい。また、カリキュラムの視覚化を図り、地域・保護者に教育活動を理解してもらうことが必要である。

③ 管理職への期待

- ・CSが導入されても学校のCEOは「校長」。CSは判断材料をたくさん得るために活用する。また、対話による信頼を構築し、face to face で情報を発信してほしい。

(6) 終わりに

- ・東日本大震災、新型コロナウイルスなど様々な災禍の中にあるが、向かい風の中にあるからこそ、高く舞い上がるチャンスでもある。そのために全ての大人が当事者として、子どもや地域の未来について語り合い、連携・協働することが求められている。福島県の子どもの未来は、今、ここから始まる。

3 講義（15：10～16：10）

演題：「社会に開かれた教育課程」が目指すもの

講師：郡山市立日和田小学校長 関 忠昭 氏

(1) 略歴紹介

- ・平成19年鏡石町教育委員会派遣社会教育主事
県内初の「学校支援地域本部」設立
総合型スポーツクラブ設立
- ・平成22年福島県教育庁 社会教育課社会教育主事
- ・平成28年天栄村教育委員会学校教育課指導主事
英語教育推進
- ・令和2年度福島県教育庁 社会教育課主幹 など



(2) 意識調査結果

① 保護者意識調査から

- ・「子どもの小学校入学に不安感じているか」第一子77%、全体60%
- ・「不安に思っていること」学校生活全般37%、友達との関係27%
- ・「学習に取り組むことで期待する成果は？」

自分の考えを人に伝えることができること 53.7%

自分なりの考えをもつことができること 52.4% 自ら取り組むこと 50%

→保護者は、人間力、総合力の育成を望んでいる。

② 子どもが将来なりたい職業

・1位 ケーキ・パン屋 19.7%

2位 YouTuber 8.2% (高学年男子では1位 20.9%)

→子どもは身近な大人や目にした物で判断する。環境の影響が大きい。

③ 環境が人をつくる

・「孟母三遷」孟子は葬儀場の近くに暮らすと葬式ごっこ。お店の隣に引っ越すと商売のマネ。学問所の隣だと勉強。→環境が人を作る。

④ 子どもの環境は「学校・家庭・地域」の3つ

・「3つの世界」「3つの価値観」の中で行き来しながら、人としてのあり方や、自分らしい生き方を見いだしていく。

⑤ 子どもは地域みんなで育てる。地域教育力の重要性。

・「場所のコミュニティ」から「関心のコミュニティ」へ変化している。そのため、地域教育力を生かされる環境が足りない。

→意図的に創り出す！その手法が連携・協働である！

(3) 社会の変化

① 日本は30年で「技術大国」「経済大国」から斜陽の時代

コモディティ化の急加速・「技術で勝っても事業で負ける」

② これからの時代に必要な物「教育」に求められる視点

◇新たな価値を創出する「発想の転換」

◇多様な他者との「協働」

◇コラボレーション（協働）でイノベーション（革新）を生む能力

(4) 必要な力とは

① 大学入試問題より

・「何を知っているかではなく、何ができるか」

・「ボクシングは100年以上オリンピック種目だったが、身体的な暴力を伴うため不適切だ」という声がある。納得のいく理由を添えて、賛否せよ。」

◇自分の考えを持ち、伝える力が必要

② 「3人の武将と天下統一」の学習から

◇「歴史を学ぶ」のではなく「歴史から学ぶ」という姿勢が必要

③ 時代を切り拓く力～発想の転換・視点を変える～

・海目の前にプールを作る（西部：堤義明）

海まで行ってプールに入る？「奇策」と揶揄

→「砂で汚れる、シャワー汚い」という不満を解消し大盛況（大磯ロングビーチ）

・経営不振時にF1レース参戦（ホンダ：本田宗一郎）

倒産の危機に巨額の費用がかかるF1に参戦

→技術開発過程で世界最低燃費エンジンを開発し大ヒット

・絶版商品を主役に（Apple：スティーブ・ジョブズ）

一度は市場から消えたスマートフォン

→用途を変え機能を追加し、世界の主流に

◇新時代を生きる子に生きる力、偏見を捨て物事を多面的・多角的に考え、多様性を認め合う子どもの教育が求められている。

(5) 社会に開かれた教育課程

① 社会に開かれた教育課程

・よりよい学校教育を通じて、よりよい社会を創るという理念を学校と社会が共有し、社会

との連携及び協働により「社会に開かれた教育課程」の実現を図る。

- ・コミュニティ・スクール＋地域学校協働活動→地域と共にある学校
- ・子どもの環境「学校・家庭・地域」で豊かな学びを育む。

② 必要性と意義

- ・社会の複雑・多様化、家庭や地域の教育力低下、学校が抱える様々な問題。
- ・地域全体で子どもを育てる体制を整える。
- ・意義、効果として学校の教育の充実、生涯学習社会の実現→相乗効果で地域の活性化

③ 地域との連携と協働の事例

- ・ある小学校で様々な新しい取組（特設陸上部、プログラミング、英語、リーディングスキル）を2年間取り組んだ。その取組は地域の力（1年目129名、2年目171名）を得て実施。
- ・学力向上、体力向上、多忙化解消という大きな効果が見られた。
→大きな要因は教員のがんばり＋保護者、地域の方の協力

④ 人生100年時代

- ・100歳以上は30年前の50倍
高齢者に必要なこと（教育【きょういく】と教養【きょうよう】）
今日（きょう）行く（いく）所がある 今日（きょう）用（よう）がある
→高齢者の活躍の場を創出する「地域学校協働活動」
→学校教育の充実と世代間交流の相乗効果

⑤ 地域と共にある学校 学校を核とした地域づくり

- ・学校、家庭、地域の連携・協働により子どもを育む全ての環境を改善し、「子どもは地域みんなで育てる」意識を醸成していく。
- ・新時代を生きる子どもたちに必要な力、思考力、判断力、人間力、総合力は学校だけでは育むことは難しい。地域の様々な人材、企業、団体等とのコラボレーションは学びの変革の重要なツールとなる。地域全体を子どもにとって温かな居場所で生きる力を育む豊かな学びの場にしていきたい。
コーディネーター役の先生方の理解・協力をお願いします。

4 閉会（16：10～16：20）

- (1) 諸連絡
- (2) 御礼